

篠本二郎

腕白時代の夏目君



# 腕白時代の夏目君



## 一

余と夏目君と相識<sup>あいし</sup>りしは、明治六年頃と記憶する。牛込<sup>やくおうじまえ</sup>薬王寺前町に一の小学校が設立された。その近傍の小供は、士となく商となく、一樣に入学を許された。大抵年齢によりて、上は一級より下は六級まで分たれて、六級より三級までは、男女混合であつた。余と夏目君とは三級にて、而も<sup>しか</sup>同じ腰掛に座を占めて居た。当時の小学校は、校舎その他の設備不完全なりしのみならず、先生も六、七十位の漢学者も交り、又洋算など教えらるる先

生には、二十歳前後はたちの人もありて、極めて乱雑なるものであつた。或時六十許ばかりの先生が、福沢塾出版の世界国尽しによりて、舶来の洋文字入り東半球の図を掲げ、緩ゆる緩ゆる世界国尽しと引合せて、亞非利加アフリカ北部の国々の名を覚束なく指示された。翌日は又同じ地理の時間に、同じ続きを教えらるることとなつたが、驚くべし、口授さるる所は昨日と異ならざりしが、掛図は之これに似寄によつた西半球で、先生は真面目に南亞米利加アメリカの南部を指して、昨日の如く平然として、亞非利加アフリカとして教えられた。現今ならば生徒は忽たちまち挙手して先生の誤解を正す所なれど、

この時分は先生の威厳隆々として、そんな事をすれば直<sup>ただち</sup>に体刑を課せらるる恐れあるにより、之を気付しものも、唯<sup>ただ</sup>一夜の中に大陸の形が一変せしに呆れて、不思議の眼を張りつめて。課業を了<sup>おわ</sup>ったこともある。

この時代の小学生は実に乱暴なものであった。先生・父兄には処女の如くありしも、交友間、若<sup>も</sup>しくは他人に對しては、今想像も出来ぬ程あばれたものだ。殊に廃刀令前後のことであつたから、小学生中でも、士族の子供が平民の子供を抑圧する度も、亦<sup>また</sup>甚しかつた。夏目君の如きも、後<sup>のち</sup>余と共に、<sup>はから</sup>図らず同じ熊本五高に教鞭を執

り、中年以後顔を合せる事になつたが、この中年時代の憂鬱・寡黙に似ず、小学時代には頗る活潑にして、善く語り善くあばれ、余の当時の綽名であつた悪太郎にも勝つて、屢々先生より叱責されたものだ。

この小学校の机及び腰掛は三人一組で、余と夏目君はその一組の腰掛の両端に座を占め、中央には牛込加賀町より通学せる、色白く眼は所謂鈴の如き、極めて愛らしき女の子が座を占めて居た。この子は、余等の算術を受持たれたる廿歳許りにして、同胞相似て色白く首細く歩行も伏目勝に極めて體質弱かりそうな先生の妹で、鈴木

のお松さんと云う子供であつた。他の先生達は、稍ややもすると教鞭で生徒の頭をたたき、或は机を打つ等の手荒きことをされたが、鈴木先生だけは温厚で且かつ病身らしく、なかなか生徒を撃ぶつなどの気合けはいはなかつた。当時余等子供心にも先生の弱々しきに密かに同情して居たが、惜むらくはその後二、三年にして故人となられた。然るにこのお松さんは容色秀麗なるのみならず、身体健康にして且かつ活潑に、各種の課業も余等の遠く及ぶ所でなかつた。殊に夏目君と余は算術が下手で、幾度となく鈴木先生に諭された。算術の課業は、今の如く先生が黒板にて練習

せしめたる後、類似の問題を出して生徒に試ましめ、出来た例ためしがなかった。お松さんは何時いつも一番に挙手して問に応じて誤ることがなかった。余と夏目君は語り合わさざるも、時には景気付けに挙手することをしたが、人に遅れて挙手せしに拘かかわらず、そんな時には運悪く解答を質問されて、赤恥をかきしこと一再ならずであった。かくして日を送る内、お松さんは余等を蔑視するが如く、時には余等の失策を外ほかの子供と一様に高笑することがあった。勿論先生もちろんの妹なれば、先生の課業の時は殊に慎み

深くありし様に思われたけれども、包みきれぬ高慢心に  
駆られて笑ったことであろう。斯くすれば余等子供心に、  
嫉妬心と憎悪の念を生ぜざるを得ない。殊にこの時代は  
婦女を賤さげすみて、学校にて男女席を同うして教を受くる  
さえ不快を感じて居たから、或時学校で夏目君から言い  
出したのか余から始めたのか覚えぬが、一つお松さんを  
酷ひどく苛いじめてやろうと云うことを相談した。併しかし先生の妹  
のことであるから、打ぶつたり抓つかたりすれば先生より大變  
な返報を受くるから、課外にお松さんが席に未まだ居残れ  
る時、お松さんの両端より腰掛けながら、余等一度にお

松さんを肩にて押しつぶす程に押し付けて苦しめてやろう、そうすれば何も証拠を残さぬから大なる罪を受くることはあるまいと一致した。その後この愧はずべきことを実行した。お松さんは顔を赤くして大声で泣き出した。余等は今更いまさら驚き狼狽して、共に学校道具もその儘ままに、門外に逃げ出したが、忽たちまち捕もろてわれて、その日より十日間、毎日課外に一時間宛ずつ、双手もろてに水を盛りたる茶碗を持たせられて、直立せしめられたるのみならず、その後は席かを更かえられて同室中一番薄暗き片隅に移された。

夏目君とは小学校で同級となりし以来、日曜日しほしほは勿論平日もゆきき屢々互に往来して遊び戯れた。当時の余の邸宅は二百年も住みなれた牛込区こうら甲良町で、夏目君の邸は町名は一寸ちよつと忘れたが、柳町を過ぎ、根来ねごろを経て、早稲田に至る十丁ばかり許手前の、左側の家と覚ゆる。何分四十年ばかり許昔のことで確しかと町名を思い出せない。十日間に少なくとも三、四回位往来したが、夏目君の家は余の家より一層淋しき田舎なりしたため、余は四回に一度位しか遊びに行かなかつた。多くは学校の帰途などに余が家に遊び、日

を暮して歸られたことも多い。夏目君の家と余の家とは共に幕臣にて、両親は相互に勿論その名を知りたるが、勤め向が異なりし為めか相識の間ではなかつた。余はかく親しく往来せし為め、その時分の子供の荒々しき風も加わりて、余と同君と喧嘩する場合も多くあつた。当時余の伯父に、今は故人になつたが、いたずらなる人があつた。余の夏目君と親しくせるを知りて、或時こんなことを余に話した。夏目の祖先は、甲斐の信玄の有力なる旗<sup>はたもと</sup>下であつたが、信玄の重臣某が徳川家に内通せし時、共にあずかりて徳川家の家臣となつたのだ。又余の家も

信玄の旗下にて、勝頼天目山てんもくざんに生害しょうがいせられし後、徳川家に降りて家臣となつたのである以上、重臣の謀叛さえなければ武田家の運命も今少しは続きしならんと、真か偽か、余が耳には親友の祖先に関する事で、極めて異様に感じた。然し当分は質ただすも気の毒で、夏日君には何にもこの事に就すきて言わなかつた。或時大喧嘩を始め、口論も尽きて已すに腕力に訴えんとせし時、手近かなこの事実を語りて嘲けつた。夏日君は俄に色を変じて引別れ、逃ぐるが如く立去つたことがある。その後も再び仲直りして常の如く遊びしが、喧嘩の場合、この事が一番同君

をへこますに有効であつたから、その後も折々この策を  
応用した。今更思えば小供心とはいへ、余の行おこないの卑劣  
なりしを感ずると同時に、夏目君の廉恥を重ずる念の深  
かりしを感ずるのである。その後廿余年を経て同君に熊  
本に会したる時、色々幼年の時のこと共話どもし合しが、終つい  
にこの事実の真偽だ丈だけは質さずして止んだ。

## 三

夏目君が、牛込薬王寺前町の小学校より、学校帰り余  
の家に立寄るには、麴こうじざか坂を登りて来るを常とした。又

帰宅の時は焼餅坂やきもちざかを下りて帰った。然るに麴坂の麴屋に一人の悪太郎が居り、焼餅坂の枡本ますもとと云う酒屋にも亦また悪太郎が居って、尚なお之等これら悪太郎を率ゆるに、鍛冶屋の息子で余等より四つ五つ年上なる大将が居た。夏目君はいつも彼等の為め種々な方法で苛めいじらるるから、何時か余と協力してこの町家の大将を懲らしてやろうではないかと相談を持ち掛けた。この時代はまだ士族の勢力が盛んで、町人の子供は一般に士族の子供に対して恐れを抱いて居た。然し夏目君が学校帰り素手で四、五の町人の子供に苛めらるるのであるから、その内総大将を一人懲ら

せば後日の憂なかるべしとの考えで、その機会の来るを待って居た。或時夏目君と余は余の邸やしきの裏門で遊び居れる時、かの鍛冶屋の悪太郎が独り、余等の遊べる方向に歩行し来れることを遙かに認めた。余等は好機逸すべからずとなし、余は家内にかけて込みて何の分別もなく先ず短刀二振りを持来りて、その一を夏目君に与えたる時は、已すでに悪太郎は十四、五間の距離まで近づき来った。当時武士の斬り棄て御免とか云う無上の權威が、猶なお町人やその子供の頭に残れる時分であつたから、武士の子供が短刀一本さえ携え居れば、年長の町家の子供四、五

人を相手に喧嘩して、終に逐い散らして勝利を収むることが出来たのである。彼が余等に接近するや否や、余等は短刀を抜き放ちて彼の前後より迫った。彼は忽ち顔面蒼白となり、隙あれば虎口より脱せんとし、又近き小路こうじの門内に入りて人の助けを乞わんとする態度にて、ぐずぐず言訳を唱えながら、二人に囲まれつつ次第に小路の中に退却した。彼が小路に入るや夏目君は手早く短刀を鞘に収めて、悪太郎に飛び付きて、双手にて胸元を押えて、杉垣根に彼を押し付けた。悪太郎は年齢が余等より四つ五つも違い、腕力も余等二人協力しても及ぶ所では

なかつたが、時代思潮上士族を恐れしと、余が白刃を持  
てるとによりて、夏目君の引廻わす儘ままに扱われて毫も抵  
抗しなかつたのは、当時極めて愉快であつた。夏目君は  
愈々いよいよ彼を杉垣根に押し付けて、彼の身体が側面より認め  
られぬ程にし、余はこの動作中短刀を彼の胸元へつきつ  
けて、夏目君と共に彼を殺して仕舞うと威嚇して居た。  
その内通行人が彼の家人に密告したものと見えて、余等  
の強迫に余念なき折、不意に廿歳許りの彼ばかの家に養わる  
る鍛冶屋の弟子が来りて、太き棒切れにて夏目君の向う  
脛を横に払つた。余も夏目君も不意の襲撃に驚きて、夏

目君が倒れて手を放すと同時に、当の敵は逃げ出し、余も亦一、二歩後退するとたん、夏目君は腰に差したる短刀を抜き放ちて、倒れながら弟子を目掛けて短刀を投げ付けた。短刀は運好く彼の脛に触れて軽からざる傷を負わした。弟子も亦この勢に恐れて、主従共に雲を霞に逃げ亡<sup>う</sup>せた。後に夏目君は打たれたる脛の痛みに、一時歩行が出来なかつたが、辛うじて余が家に帰りて、水を掛けたり白<sup>はくりゆうこう</sup>竜膏を塗つたりして、日暮に跛<sup>はこ</sup>行して帰り去った。この事ありし以来余等柳町辺を闊歩するも、毫も町家の子供に苛めらるることがないばかりでなく、

偶々<sup>たまたま</sup>四、五の悪太郎の集団に会するも、彼等は成べく見ぬ振りをして余等の視線を避くる様子であつた。夏目君はこの時代、性質活潑なると共に、疝癩<sup>かんしゃく</sup>も著しかつた。余と屢々<sup>しばしば</sup>喧嘩したのも之が為めであつた。然るに中年沈黙・憂鬱の傾向ありしは、文学思想に耽りし為めか、或は修養の結果であらうと思はるる。

余等は当時の子供のあらゆる悪戯<sup>いたずら</sup>を仕尽したる中に、極めて面白く思い、今もその時の光景を思出しては、私<sup>ひそ</sup>かに微笑を浮べることがある。毎日午後の四時頃に、余が邸の板塀の外を二十二、三歳位な按摩が、杖をつき笛

を吹きて通過した。此こやつ奴盲人に似ず活潑で、よく余等を  
 悪罵し、時に杖を打振りて、喜んで余等を逐い廻わした。  
 余等も折々土塊つちくれなど打付けて、彼を怒らした。或時学校  
 で夏目君と一つ按摩をなぶ黽なぶってやろうと色々に協議した。  
 併し何時も矢鱈やたらに杖を振り廻わすから、容易にその側に  
 寄る訳にはいかぬ。そこで或時二人して、恰あたかも按摩が  
 塀の外を通過する頃、塀に登りて、一人は長き釣竿の糸  
 の先きに付せる鉤に紙屑をかけ、一人は肥柄杓こえびしやくに小便を  
 盛りて塀の上に持ち上げて、按摩の通過を待つ程に、時  
 刻を違たがえずやって来た。一人は手早く紙屑に小便を浸し

て、釣竿を延べて魚を釣るが如き姿勢を取りて、小便の滴した  
 たる紙屑を、按摩の額上三、四寸の所に降して、一、二  
 滴小便を額上に落した。この後の按摩の挙動を思い起す  
 時は、今も笑を抑ゆることはできない。笛を持てる左手  
 にて、晴天に怪しの水滴の降りたるに驚きて、にわか俄に立  
 留りて、たなごころ掌たなごころにて水滴を撫でて、直にその手を嗅かいで見  
 る所作をなす。嗅でその臭きを知るや、忽ち憤怒の形相  
 となり、阿修羅王の荒れたるが如く、その近傍に人あり  
 と察してか、左右前後に杖を風車の如く振り廻して、暗  
 中人を探るが如き状をなせども、人の気配なき為に、再

び立留りて思案の体ていをなす。この時更に又額上に二、三滴を落せば、愈々いよいよ罵り荒れて杖を振り廻わす間に、最後に十分小便を浸したる紙屑を鼻頭に吊り下げて、小便を塗り付け、共に静かに塀を下りて逃げたことがある。この悪戯は小供心にもそぞろに罪深く感じて、申合わさずも再びせなかつた。

この頃牛込の原町に芸名玉川鮎之助と云う、日本流の手品師が居つた。牛込の馬場下や又は焼餅坂下の下等の寄席に、時折り田舎廻りの芸人が臨時に寄席よせを打つ時に交りて、手品を演じたものだ。さればこの地方の不潔な

理髪店などにビラとして、しばしば屢々玉川鮎之助の名の掲げらるるを見た。余は或時夏目君にこんなことを言った。君の名の夏目金之助と云うのは、何んだか芸人らしい様で、少しも強かりそうでない。玉川鮎之助と余り異ならない。もつとえらそうな名に変じたらどうだと。夏目君は、僕も密かに気にして居るが、親の付けた名前だから、今更変えることが出来まいとあきらめて居ると。当時夏目君は武張ぶばった事が好で、後日文学を専門として、人情の微を穿つ様な優しい小説など書く人になろうとは思ひ寄らなかつた。

この時代世間では、洋学を学ばざれば人間でない様に考えられた。余等はまだ幼少にして毫も考え及ばなかつたが、両親は余に英語学校に入学することを勧めた。然し当時英語学校は希望者多くして、読本の四位ぐらいを読み得ざれば入学が六ヶ敷むつかしいと云うので、外国語学校の仏語学に入学して、その間別かんに英語を修めて英語学校に入りて後、大学予備門に進んだ。故に夏目君とは小学の三級にて別れたる後、学校を異にしたる為め相逢うことなく、又交友も更かわり、稀に相互に訪問するも、不在等にて、別後殆ほとんど夏目君の消息を得なかつた。聞く所に抛れば

第一高に在学せられし由なれば、小学も全課卒業し、中学・高等中学と順次正当に進んだものと思わるる。

## 四

夏目君は幼時より虚言を吐いたことがなかった。又人一倍然諾を重んじ、若し余儀なき事故ありて約束を違えることなど起りし時は、平素の剛情に似ず自から非常に愧じて、後日幾回となく弁疏をなし、相手の満足するまで気に掛けて止まなかった。尤もこの時代の武士の子供は一般に不文律として、虚言を吐くな、人の物を盗む

な、喧嘩したら負けるなを、言わず語らず、固く守って居た頃であるから、今日から見ると、当時の子供の心理状態は多少今日とは相違して居たのである。殊に夏目君は虚言うそつきと言わるることを、神経質かと思わるる程に、気に掛けて居た。或年の初夏、同君が戸塚村の小丘に野生の木苺きいちごが沢山熟して居るから、学校の休に共に摘み採りに行こうではないかと、余を誘うたことがあつた。是より先夏目君と穴八幡あなはちまんに銀杏ぎんなんの実を拾いに行つて失敗したから、之これに懲りて余は即答しなかつたが、屢々しばしば戸塚村行を勧めらるるから、その後数日を過ぎて二人して出掛

けたことがある。余が甲良町の家より戸塚村までは一里  
足らずあるから、一日の仕事に沢山摘みて帰らんと思  
て、子供の持つに不似合な大きな籠を準備して同君を誘  
い、途中戸塚村に一軒家で、名物の粟煎餅あわせんべいを売る百姓家  
があつたのに立ち寄りて、弁当を預け、煎餅あがなを購あがないて、  
左折して木苺のあると云う小丘に着いて、此処ここかしこ彼処と共  
に探し廻つたが、木許ばかりで実は一つもなかつた。何時か  
村童が来て取り尽したものと思われた。夏目君は十二、  
三日前に近所の友と来ておびただ夥しくありしを見しに、かく  
許り一物も留めざるは実に不思議なりと、余に對して非

常に気の毒に思い、二、三丁の茨の間を隈なく探し呉れたけれども、十二、三粒を穫たるに過ぎなかつた。最早仕様がなから帰ることに決したが、道すがら夏目君は余を色々に慰め、且粗漏そろうの罪を謝された許りでなく、その日は直に自宅に帰らずして、余を家まで送ってくれた。その後余は戯れに夏目君に或機会に、君は虚言を吐くとのうじつ曩日のことを持出して笑つたら、同君は俄かに色を変えて真面目になり、決して虚言を吐いた訳でないから、是非更に一回同行し呉れと言ひ、その後も数回氣に掛けて同じ言を繰り返された。余は全く一寸戯れに言つたこと

で、毫も君が心を疑つて居らぬと、その度毎に弁疏したが、当分同君自から苦悶して止まなかつた様である。當時同君は独りを慎むことの急なりしのみならず、交友の不信・不義を責むることも随分激くして、為めに交友の数も少ない様であつた。然るに廿余年を経て熊本で再会せし時は、昔日の態度とは稍趣ややを異にして、生徒又は交友の或者が同君に不義・不信の行をなせしことなど、同君より聞きしに拘かかわらず、幼時の如く酷きびしく之等を咎めず、相変らず交際をして居られた。思うに長ずるに及びて修養の結果、自ら戒むるだけで、人を責むることを緩

うした様だ。又一時怒っても忽ち氷解する、江戸子気質に  
変じたものらしい。(二月十九日)

(『漱石全集』(昭和十年版)月報第二号(昭和十年十二月))



日本文学電子図書館

---

## 腕白時代の夏目君

著 者：篠本二郎

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館